

## 2025年7月の総評に代えて

○林 桂 ○

### ●和泉次郎 ●(新潟県 50歳)

熊、マジか  
熊、火事、マジか  
熊、マジか  
熊、熊、マジか  
市からのメール

【評】市から緊急を知らせるメールの受信を列挙する。熊の出没の危険と火災を伝えている。全体のリズムが、谷川俊太郎の「ことばあそびうた」を思わせる。どのお知らせにも、「マジか」の一つの反応である。メールを介することで、緊急性がやや稀薄になっている心の動きを捉えている。最後の「市からのメール」は、種明かしで落ちをつける役割をしている。

### ●azusa ●(京都府 24歳)

レバーを倒して生ビールを注ぐ  
何かを忘れたような気がして

【評】「何かを忘れたような気がして」という

以上何を忘れたのか分からぬ。あるいは忘れているものなどないのかも知れない。「レバーを倒して生ビールを注ぐ」一瞬に降りてくる心の揺蕩い。こんな一瞬を持ちながら、私たちが生活しているのだろう。

●金光 舞 ●(埼玉県 18歳)

どうすれば  
上手く生きられるのだろう  
柔らかい桃を冷凍してみる

【評】「どうすれば／上手く生きられるのだろう」は、生きがたい若い人が一度や二度は自分に問う問題だろう。もちろん、「柔らかい桃を冷凍してみる」が、直接その解決方法になりはしないが、一時的な休息と慰撫は与えてくれそうだ。そもそもこのような纖細な感性が、生きがたさを生んでいるのかもしれないのだが。

●塩本抄 ●(石川県 37歳)

暗闇に子らを泣かせて  
なまなまと動く恐竜の動かない足

【評】「動かない足」の捉え方が見事。恐らく実物大で動く恐竜の展示物。博物館か駅頭

の広場か。「なまなまと動く」その姿に子どもは泣く。しかし、絶対に襲ってはこない。「動かない足」で、固定されているからだ。大人はそこを見る。

●早瀬はづき●(大阪府 21歳)

水の秋  
絵を見ても  
むき出しの器官をぬらしつづけて  
人は

【評】ぬらしつづけている「むき出しの器官」は、「見ても」からも、目であろう。涙で濡らし続けなければならない器官がむき出しになっているのは、遠く海に生まれた命の名残か。そんな感懷だろうか。

●あゆな●(群馬県 40歳)

節約が限界らしく憤る母へ  
鰻の松を届ける

【評】物価高の中で切実な僕約生活を強いられている老齢期の母。いつもその限界を感じながらの日々なのである。母の怒りを生んでいる、その節約生活では決してたどり着けない「鰻の松」を、子はプレゼントする。一時

しのぎだが、しばし心は慰む。子も本質的な解決策は持ち合わせてはいないのだから。

●青木菓子●(兵庫県 20歳)

ごぼう切るときだけ思い出す童話

【評】ごぼう切るときだけ思い出す童話という切り口は斬新。この童話は「にんじんだいこんごぼう」だろうか。よく体を洗わなかつたばかりに黒い体のままなのがごぼうである。しかし、この話の中で、最も親しみが湧くのも、ごぼうに違いない。扱いにくい食材のごぼうも、この童話を思い出すと手間をいやとは思わないですむのかもしれない。

●雨宮 慈●(静岡県 31歳)

左手に Suica を持ったまま  
通れる駅を最寄駅にしたい

【評】作者は左利きのなのであろう。確かに駅の改札は右利きに便利なように、右側に置かれている。左利きゆえに感じる日々の違和感。小さな物に違いないが、日々の中では積もってゆく。左利き用の改札駅があれば、そこに住みたいと思うほどに。右利き用に作られた世界に生きる左利きの人だけに見

えている世界だろう。

●にわ●(栃木県 29歳)

にんげんが泣くのに三十一音で  
じゅうぶんなのだテトラポッドよ

【評】なぜ「テトラポッド」に呼びかけるのか分からぬ。呼びかけの意味を理解しない存在として選ばれているのかもしれない。いや、この呼びかけを理解するという対象がいるのも鬱陶しいことなのかもしれない。短歌三十一音は重いのか軽いか。

●山野ゆかり●(東京都 35歳)

花冷えに銀器を磨く  
こんどこそ  
ゆうれいの子に生まれなおせる

【評】「ゆうれいの子に生まれなおせる」という思いは、大人のものではなく、童話的な世界を生きる子どものものだろう。ここでは、ゆうれいは恐れるものではなくて、親しい存在として認識されている。「花冷えに銀器を磨く」が美しい。やや冷たい感触を通して、魂は子どもの世界へと磨かれてゆくようだ。

●春蜜柑 ●(群馬県 16歳)

### 蟻塚を壊しもうすぐ百日目

【評】「百日目」の今は、蟻たちはほぼ蟻塚を修復して生活していることだろう。土竜塚や蟻塚を壊したり、水を注いだりするのは、子どもの残酷な遊びの一つだが、蟻も土竜も「天災」にめげることはない。それを観察する目的が、子どもの破壊行為だったりする。

●芒川良 ●(東京都 24歳)

エスカレーターの  
手すりが濡れていて  
わたしは誰のものでもないが

【評】突然降りてきた「わたしは誰のものでもないが」の思いが、どこに向いているのか分からぬ。あるいは、自分自身のものでもないと感じているのかもしれない。たまたま濡れていたエスカレーターの手すり。誰かの名残に違いないが、それが不思議な浮遊感をもたらしたのであろう。

●小川 未夜子 ●(石川県 29歳)

父が好き  
という理由で嫌ってた  
丸亀製麺に寄っていく

【評】不和の父親が好きだというだけの理由で、嫌っていた丸亀製麺に寄るようになったのは、父親と心で和解したからである。解決したのは、時間か距離か、あるいは世界を異にしたからか。丸亀製麺に寄るというだけで、父との葛藤ドラマを描きだす。

●上原一樹 ●(群馬県 19歳)

遠くから声で呼ばれて岸の夏

【評】「声で呼ばれて」が深い。思えば、呼ぶ方法はいろいろあり、声もその一つに過ぎない。「岸の夏」からは、対岸の人が呼びかけているというように読める。しかし、彼岸から此岸への呼びかけであれば、意味は重層化してくる。そのなかでの「声」である。この「声」もまた重層化する。

●甘煮 ●(京都府 23歳)

アッパッパー着て太陽まで歩く

【評】ゆったりとした女性の夏服である「アッパッパー」は、戦前に流行ったものである。今は年配の人しか分からぬんだろうと思ひながら選んだのだが、作者が二十代前半の若い人と知り、すこし驚いている。「太陽まで歩く」に、開放感が描かれている。

●榎本 圭子●(大阪府 48歳)

リハビリで市民プールを歩く人  
故郷の土に愛猫埋める

【評】「市民プールを歩く人」自身リハビリ生活を送る都市生活者である。住む都市空間には、亡くなった愛猫を埋葬する方法を持たないのだろう。故郷の地に赴いて埋葬する以外にないので。都市に生活する孤独と不安と、細く故郷と繋がっている姿を描く。